

横浜の勤労青少年

—実態と対策の問題—

深 沢 淑 子

① 勤労青少年の実態とその生活環境

本市は、京浜工業地帯の一翼をになう重要な工業都市であるとともに、国際的な港都でもあるので、事業場の数は5万に余る状態である。ここに働く勤労者は総数60万に達し、25才以下15才までの勤労青少年はおよそ15万人（内18才以下の年少労働者、3万7千人を含む）が居住している。

これら多数の勤労青少年は、どのような職場に働いているのだろうか。大企業は相当あるように見えても、300人以上の雇用者数のある事業場は市内に161あるだけで、全体のわずか0.3%にすぎない。以下、第1表にしめす通り、労働者数の少ない事業場ほど数が多く、1人から9人までの勤労者を持つ零細企業が、全体の80%を占めている。80%の中小企業が、わが国の産業を支えているといわれる。その二重構造は、本市にもはつきり現われている。

こうした職場で青少年は、1日の大半を過ごしている。作業の面から見ると、必ずしも大企業が快的というわけにはいかない。オートメーションの大工業では、1日中ゲーヂをにらんでいなければならない職場もある。ほんの小さな部品を研磨するだけが作業であったりする。1日の大部分を機械の一部と化して、人間性など没却してすごさなければならぬ。大企業に働く青年たちが、こうして一生を過ごすのはあまりに単調で考えただけでぞっとする。何かもっと楽しめる職場はないかと相談を受けたことがある。その点では、物を作る楽しみは、かえって小企業にある。自分の手によって完成品に作り上げることに、いい知れぬ喜びがある。

しかし大企業では、年少労働者に対する教育も考えられていて、ほとんどが事業場内職業訓練（2年乃至3年）を実施している。又

宿舎その他の厚生施設も備っている。賃金の点でも格差は縮まったといっても、まだまだ大企業の方が恵まれている。

中以下の企業では、急に上昇した賃金に追

第1表 雇傭者数別産業（38.4.1現在）

人	人	人	人
1～9	41,244	50～99	979
10～29	6,282	100～299	496
30～49	1,732	300人以上	161

われて、厚生施設まで手が廻らないのが実情のようだ。殊に雇用者の少ない零細企業では経営者の頭に前近代的な考えが残っていて、それが企業発展の障害をなすとも知らず、従業員の教育とか福祉など念頭にない人もある。

しかも勤労青少年は一樣に将来に対して、大きな希望や夢を持つことを許されない。大企業では学歴がないということは、いつか昇進が頭打ちになる時期が来ることを決定づけている。中少企業は力次第といっても、上に立つポストが限られている。商店でものれん分けなど昔語りで、充分な身分保障もむづかしい。

今日のように、産業化の波が急激に押し寄せつつある一方、まだ色々な面に合理的でないものが残っている社会で働くことは容易でない。ことに感じ易く、自我に目覚めつつある若樹の彼等は、根をしっかりと張っていないだけに、一寸したことが、挫折の原因になったりする。

1日の作業からようやく解き放たれても、住宅問題の解決していない現在、帰って行く家にゆっくり休む場所もない。商店の閉店は遅く、夜9時を過ぎなければ、自由な時間は持てない。向学の希望を持って定時制高校には入っても、雇用主あるいは上司の無理解が障害となる。残業で休校を余儀なくさせられる。試験の日が残業に当れば、登校はできない。それが重なって、つい厭気がさし、学校を退学する。割り切れない思いで街に出て見れば、繁栄ムードの氾濫である。溢れる商品、無数の遊び場、映画館、パチンコ屋、ボーリング場、食堂、バー等々こうした環境に囲まれて、自分の給与や生活との隔りに無心でいられるはずもない。いつしか心の安定を失なう者があつても、彼等だけを責めることはできない。

青年達と語り合ってみると、真面目な人ほど、背負い切れない矛盾に悩んでいる。

しかしこのような中にあっても、自分を全面的に受け入れてくれる家庭があれば、まだ救われる。

つい先日、この4月戸塚区の事業場に就職した一少女が、故郷を離れて1ヶ月もたたぬうちに、自殺した事件があった。誰もこの少女を慰める人はなかったのだろうか。暗い顔に気づく人はなかったのだろうか。何とも残念なことで、あきらめ切れぬ思いだ。

本市には全国各地から、集団あるいは縁故で、遠く家を離れて就職して来た青少年が相当数居住している。本年も4月に1,400人の中卒者と8百人前後の高卒者が来浜した。出身県は全国的に見て、東北方面が最も多く、北陸、九州がそれについている。(第2表)

第2表 中卒集団就職者出身県

(39 4. 1)

総 数	福 島	新 潟	宮 城	鹿 児 島	熊 本	福 岡	その他
1,409 人	282人	207人	178人	163人	124人	74人	381人

就職少年を送り出した県では、彼等がどのような心情で新しい環境に生活しているかということに、強い関心を持っている。昨年、青少年問題協議会全国会議が首相官邸で開かれた際にも、山梨県の方から横浜方面へ沢山少年が就職しているが、その受け入れ態勢はどのようになっているかという質問があったという。筆者も数年前、或る全国会議に出席したさい、やはりこの問題について、福島県の方から質問を受けた。送り出す時は町を挙げて歓送会を開き、町長さんも校長さんも駅頭まで見送りする。所が3カ月もたたないうちに、こっそり帰って来るのがある。しかもどこに就職するでもなく、ぶらぶらして遂に非行化して行く。それを「就職帰えり」と名づけて人々は爪弾きする。その対策に困っている。何とか受け入れ側でこのような問題の起らないよう温い手をさしのべて欲しいと熱心に語ってた。また数日前、九州の諫早市の社会教育主事に桜木町の働く青少年憩の家でお会いした。京浜間にこの4月就職した少年達の状態を調査に見えた機会に、立ち寄られたのだ。その折、就職少年に対しては、人との応待のエチケット、電話の掛け方等々細かく指導して送り出していると語られた。横浜で働く諫早市出身の青少年の名簿を見せてもらったが、40人ほどがはるばる長崎県から単身横浜に来て働いている。

このように出身県では、大きな関心を持って、勤労青少年の健全な成長を願っているのに、受け入れ側の横浜は、それに対しどれだけの配慮をしているであろうか。ほとんど、それは企業体に委せたまま、何の手も打っていないのが現状ではないだろうか。

しかしこうした状態の中であって、本市の大部分の働く青少年は、逞しく真面目に生きている。今、私の関係している横浜働く青少年憩の家に来る青少年を見ての実感である。

身体的疲労に打ち勝ち、人間関係の煩わしさにめげず、定時制高校を卒業した人々、通信教育で高校課程を終え、大学に堂々とパスした人、休日には養護施設を訪ねては幸薄い子等を慰問するのを喜びとしているグループ、また趣味を同じくする人々が集って活発に活動している諸々のサークル、(詩、文学、コーラス、バンド、山登り等)。彼等はみんな発らつとして若い日を明るく楽しんでいる。

② 勤労青少年対策と問題点

以上、横浜における勤労青少年の実態を記したが、さて、それに対する施策は、一体どのように実施されているであろうか。

まづ教育の面から見れば、定時制高校は、県立、市立、私立を合せて5校(外に分校1)在籍者4千10名である。これとても狭き門で希望者をすべて入学させることはできない。その他講座式の研修は、教育委員会主催で、勤労青少年教室、その受講者が大部分勤労青年である成人学校等が、中央あるいは地区で年間2回程度開かれている。

その宿舎については、経済局中小企業課の扱いで、中小企業の従業員共同宿舎に対する融資が行われているが、現在、融資を受けて建設されたものの数はわずかである。

余暇善用・他県よりの就職者の憩いの場としての施設にいたっては、市設置のものは未だ皆無といってよい。わずかに桜木町の憩の家が市の補助によって設立され、運営されている。他に町内会等で、働く青少年、主として店員のための施設を持っている所も数カ所あるが、それは憩の場より、茶道・華道、その他の研修の場として使われている。それは純粋に働く青少年のために建てられたものではなく、町内会事務所の一部がそれに当てられているが多い。働く青少年憩の家に関係する1人として、こうした施設がいかに必要であるかを痛感しているの、その概要を記したいと思う。

はじめ、横浜市内の協助力員（神奈川婦人少年室の補助委員）が中心となって、商工業関係、その他各方面の協力を得て、横浜市勤労青少年福祉協会を設立し、建設を企画した。幸い市当局の理解を得て、まづ、現在の建物の1階の無償貸与を受け、補助金、寄附金等によって改装し、昭和35年7月開始したものである。

その目的は、遠く家を離れて中小企業等に働く青少年に、思いきり手足を伸ばせる場を与えたい。また働く青少年が休日や終業後の余暇を、明るく有意義に過ごす場をつくりたい。同時に彼等が、趣味や教養の自主的活動を進める場として、提供したいという願いであった。

開館するや、日を追うて利用者の数を増し、半年もたたないうちに増設しなければ收拾のつかない状態となった。そしてついに2階も貸与を受けて再改装に取りかかり、昭和38年1月に、現在の140坪の憩の家となった。

その設備は勿論充分とはいえ、図書室、休養室、音楽室、集会室（5室）、サロンで、その中に、ピンポン台2台、ステレオ、テレビ、図書をそなえているのみである。

また各種教養種目の講習も主催している。英会話、生花、茶道、洋裁、コーラス、フォークダンス等。

現在利用証発行数4,094名、1日平均216名、日曜日には400名前後の男女青少年が館に溢れる。協会主催の各種講座に集る者、静かに1人勉強にいそしむ者、自主的サークル活動を楽しむ者、ピンポンに夢中な少年、利用の仕方はさまざまである。だが一様に憩の家に対して断ち難い親しみを持っている。

これは設備があるからという言葉では、説明し尽せないものを持っている。他の大都市にあるこうした施設に比較したら、まことにささやかな建物であり、貧弱な設備である。しかもこのように利用され、親しまれてきたのはなぜだろうか。やはりこれは、青少年を心から愛し理解する人達が、カウンセラーとなりあるいは管理に当たったことが、成果を上げつつある大きな原因ではないかと思う。

家を離れ、孤独にさいなまれつつ、働く少年は、ここを訪れて優しいおばさんに温く迎えられる、すっかり母親のように親しんで休みの日を待って何やかやと話しにくる。また家庭的な悩みも、職場の問題も本気になって話を聞いてくれる指導員がいるので来ることが

楽しいという青年。最初は何処か崩れた感じだった少年がいつかきりっと締った態度になってくる。昨年の十月、憩の家は大切な指導者だった山田氏の突然の訃に遇った。私達も青少年も等しく大きな衝撃を受けた。早速、青年達は誰の差図も受けず、自分達で追悼会を計画した。仲間の醸金で立派な祭壇を調べ、花を供えた。私も招かれてその席に連なったが実に真情溢るものだった。名を呼ばれずとも次々と立って祭壇の遺影にむかって別れを惜しみ、切々と哀悼の言葉をのべ、生前山田氏が何気なくいわれた一言一言を嗚咽のうちに、胸に刻むように語る彼等、あれ程真実に満ちた追悼会を私はかつて知らなかったといえる。山田氏はこの青年達の心にしっかりと生きている。この心の通いこそ憩の家が青少年に親しまれる原動力となったのだと、しみじみ考えさせられた。

以上、憩の家について紙面を費したのは、こうした施設がいかに求められているか、また、カウンセラーがいかに大切であるかということ強く主張したいためである。

上述によっても、横浜の勤労青少年対策はまことに微々たるもので、見るべきものがないといっても過言ではない。では、今後いかなる施策が必要であろうか。

先づ教育の問題から考えて見たい。教育訓練の場は、年少労働者を内容豊富な人間に成長させ、発展する社会に適応する人間を形成し、安定した経済生活を送ることの出来る資質を育てるために、まことに必要なものと考えられる。それは青少年自身を利するのみでなく、使用者側から見ても有益なことである。企業は人なりといわれているが、内容豊富な人間が企業内に多いことは、その企業の発展を招来する。18才以下の年少者を雇用する場合、その望む者に学校教育を受けさせなければならぬと義務づける制度はできないのか。なお一歩進めて、年少労働者は労働時間6時間を越えてはならない。ただし、この余暇は学校教育を受けねばならぬ、ということになったらなお幸せと思う。しかし、これは現在夢に過ぎぬだろうか。ともあれ、教育の問題はひとり横浜市だけで解決することはできないが、世論として盛り上げ、将来実現に持って行きたいものだ。

次に、中小企業に働く従業員宿舎の問題がある。そのための貸付金制度はすでに横浜ではできているが、これを一事業場、一組合に委せておいても、その実現は容易ではない。たとえ建設されたにしても、純粹の従業員だけのためのものになりにくいのではないか。彼等だけの共同宿舎を作って欲しい。雇用主の中には、外と接触の多いそうした宿舎に住わせるのを好まぬ者も生ずるかも知れない。しかし時代は激しく移っている。どこにおいても彼等の眼や耳をふさぐことはできない。良き監理者を得れば、必ず成功するに違いない。名古屋にはすでに建設されている。まづ1カ所作って成功したら、それを各区に及ぼしたい。そこから健全な産業人が巣立って家庭を営む日まで、明るく過せる家があったら、他県から来た青少年も、どんなに幸せかわからない。手放す父母も安心して送り出すに違いない。

最後に余暇利用の施設の問題にふれたい。前述の憩の家のような施設が、各区に1カ所

位は是非望ましい。勿論そこには青少年を、心から愛する人を配置する必要がある。

さらに元締めとして、中央勤労青少年センターを是非建設して貰いたい。横浜と交りの深い大阪、京都、名古屋にはすでに豪華な働く青少年の家がある。それらは国の補助（労働省扱1千万円補助）と地元の負担で建設されたもので、素晴らしい近代建築の中に至れり尽せりの設備が整っている。私達から見れば垂涎の思いである。なお大阪、京都には国庫補助を受けたものの外に、市独自で建てた立派なものもある。この横浜にして、こうした施設が今までなかったということは、むしろ不思議といわねばならぬ。

もとより施設さえあれば、勤労青少年対策が事足るものでないことは勿論である。しかし彼等が抑圧された勤労の場から放たれ、充分に自分自身を取り戻して人間的な喜びを味いつつ向上することができたり、仲間作りの楽しみに孤りでない人生を知るサークル活動の場を与えることは、どれ程大切なことか知れない。そしてそこに、優れたカウンセラーを必要とすることは、忘れてならないことだと信じる。産業が高度に発達して豊かな社会（物質的な意味で）が実現すればする程、人間性の失われて行くのは、多くの学者の指摘している所である。勤労青少年が、人間としての豊かさを失なうことのないよう、万全の策を講ずるのは、私たち大人のつとめではないか。

市当局も、この点充分研究調査して、その実現に踏みきって欲しいものだ。それを勤労青少年も鶴首して待っている。

以上は、働く青少年憩の家を預る1人としての立場から見た、横浜の勤労青少年の問題である。客観性に乏しい憾みがあるに相違なく、内心忸怩たる思いで筆をおく。

（三栄厨房社長）
横浜市青少年協議会委員